

私を育てた
あの時代、あの出会い

第17回

全てを任せられ試行錯誤した経験が 指導の幅を広げてくれた

山形県 酒田市立第三中学校校長 太田英一 OTA EIICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、太田校長が語る。

就職1年目の私に
「研究発表を任せただぞ！」

思えば、20代でさまざまな経験を積み重ねられたことが、私の教員としての土台を築いたのだと思います。初任校ではいきなり1年生担任を任せられました。意欲だけは満々の私を指導してくださいだったので、朝井融先生です。先生は当時41歳、同じ学年の担任、教科も同じ保健体育科であり、新米の私に勉強させようという気持ちでいてくれたのだと思います。とにかく何でも任せてくださいました。5月頃、朝井先生に「本校が研

究当番校になった」とその担当者に指名されました。生徒の体力低下をテーマに研究し、秋には地区で、冬には県で発表しました。2年目は新教育課程移行措置中の保健体育のカリキュラム作成を命ぜられ、他教科は主任級の先生が担当する中、新米の私が教科での案を作ったのです。未熟でまだ指導方針も定まらない中、カリキュラム案を何度も作り直したりと試行錯誤を繰り返しながら、私は本を読みあさり、外部の研究会に参加し、とにかく勉強しました。朝井先生はそうした私のことをよく褒めてくださいました。同僚の



おおた・えいいち 専門教科は保健体育科。酒田市立第二中学校、鶴岡市立鶴岡第一中学校、庄内教育事務所などを経て、現職。部活動では主に体操部の顧問を務める。山形県中学校体育連盟体操専門委員長、副会長等も歴任。

1977 (昭和52)
酒田市立第二中学校
に新採で赴任。
朝井融先生と出会う

1979 (昭和54)
余目町 (現庄内町)
教育委員会
社会教育主事補に
着任。その後、
社会教育主事に

1983 (昭和58)
藤島町立 (現鶴岡市立)
藤島中学校に赴任

1990 (平成2)
鶴岡市立
鶴岡第一中学校に赴任

1994 (平成6)
山形県教育庁
庄内教育事務所
指導主事に着任

1998 (平成10)
三川町立
三川中学校に赴任

2000 (平成12)
余目町立 (現庄内町立)
余目中学校
に教頭として赴任

2002 (平成14)
山形県教育庁
庄内教育事務所
主任管理主事に着任

2005 (平成17)
松山町立 (現酒田市立)
松山中学校に
校長として赴任

2008 (平成20)
山形県教育庁
庄内教育事務所
管理主幹に着任

2010 (平成22)
酒田市立第四中学校
に校長として赴任

2013 (平成25)
酒田市立第三中学校
に校長として赴任

「進化の反意語は停滞、 常に一步先に行くことを考える」



先生方と飲みに行く際に私も誘い、私が授業で工夫していることや研究発表の内容などを、他校や他学年の先生に話してくれたのです。「頑張ってるな」それはよいアイデアだ」と先輩の先生方から声を掛けていただくことは、とても励みになりました。

朝井先生からは、生徒を幅広く見取る大切さも学びました。先生は特にやんちゃと言われる生徒から慕われ、その生徒が「親に言われたので」と差し入れを持ってくるほど、保護者の信頼も得ていました。先生は「生徒は1つではない。いろいろな面がある」とよく言われていましたが、私には見えない生徒の良さを、まさしく先生は見取っていたのだと思います。朝井先生の生徒とかわる姿勢は、自分の目標となりました。

初任校で学びたいことがまだまだありましたが、3年目に教育委員会に異動し、社会教育主事補となりました。当初は本意ではない仕事に戸惑いも多かったのですが、園児向けのダンスを創作したり、高齢者クラブの運動会を支援したりと、さまざまな年齢の人たちを指導することは楽しく、また勉強になりました。更に、学校の研究会でも指導や助言を担当し、発達段階を踏まえた体育指導を考えられるようになりました。

地域の人々とかかわり、学校をどう見ているのかを直に聞いたことは、私の学校観を大きく揺さぶりました。非難を受けた時には激しく反論したこともあります。でも、なぜ誤解されているのかと考えた時、学校はその様子を外に伝えていないのだと気付きました。学校はもっと社会にかかわるべきだ——若手時代に学校を外から見た経験は、私の学校教育の見方を変えたのです。

**教師の幅を広げることが
生徒の人生も豊かにする**

学校現場に戻り、いわゆる荒れの状態の学校に赴任することもありました。私は常に生徒の良さを引き出すこと、生徒が地域にかかわることを心掛けました。生徒が誇りを持てる学級づくりをしようと、体育祭や合唱大会などに全力で取り組んだところ、年度末に学級全員が賞状

を持てるほど生徒たちは活躍しました。また、地域の運動会に教員と共に生徒も毎年参加。種目に出場するだけでなく、会場の設営やゴミ拾いなど地域に根ざした活動をしていきました。生徒と直接かかわることによって、地域の方たちに生徒の良さを感じてほしいと思ったからです。そうして学校内や地域とのつながりを深めていき、それと共に荒れがだんだん小さくなっていきました。

教員自身の幅が広がれば指導の幅も広がり、それは生徒の人間的な成長に結び付くことでしょう。ですから、私がそうだったように、先生方にはいろいろな経験を積んでほしいと考えています。例えば、ずっと生徒指導を担当してきた先生に他の分掌をお願いし、出てきたアイデアを生かしながら、まず実践してもらっています。

「進化」の反意語は「退化」ではなく、「停滞」だと思ふのです。安定の上にあぐらをかいていたら、進歩はありません。一步先を行くためにはどうすればよいかを常に考え、動いていく。常に進化し続けられる先生と学校を育て、生徒の成長を支えていきたいと思ふます。